# 16［小説］　『の』

─川岸の食堂の息子で小学二年のは、河に浮かぶ船で生活する貧しいと知り合う。信雄の父からお金をもらって、ほしかったおもちゃのロケットが買えるかと楽しみに二人はに出かけていく。お金を持って遊びに行くのが初めてという喜一に、信雄は自分の分のお金も持たせてやっていた。─

　「えっ、なに？　どないしたん？」よく聞きとれなかったので、信雄は喜一の口元に耳を寄せた。「お金、あらへん。お金、落とした」風鈴屋の屋台からこぼれ散るａ夥しい短冊の影が、喜一のｂ歪んだ顔に映っていた。信雄と喜一はもう一度商店街の端まで行き、地面をみながらじぐざぐに歩いた。再び風鈴屋の前に戻って来たが、落とした硬貨は一枚も見つからなかった。喜一のズボンのポケットは、両方とも穴があいていた。信雄が何を話しかけても、①喜一は黙りこくったままだった。人波に乗って二人は境内に流されていった。（中略）

　ｃニブい破裂音が聞こえ、それと一緒に硝煙の匂いがたちこめた。信雄と喜一の前にプラスチック製の小さなロケットが落ちてきた。境内の奥に、とりわけ子供たちの集まっている露店があり、おもちゃのロケットがに並べられていた。喜一が足元のロケットをすばやく拾いあげ、信雄の手を引いてその露店の所まで走った。はちまき姿の男は茣蓙に座ったまま喜一の手からロケットを受け取り、「サンキュー、サンキュー、ご苦労さん」とれた声で言った。信雄と喜一は②顔を見合わせて笑った。「それ、なんぼ？」「たったの八十両、どや、安いやろ」二人はまた③顔を見合わせた。二つも買えたうえに、焼きイカが食べられたではないか。「さあ、もういっぺんやって見せたるさかい、うていけよ！」危ないぞォ、月まで飛んで行くロケットじゃあと叫びながら、男は短い導火線に火をつけた。信雄も喜一も慌てて二、三歩とびのくと、をんで導火線を見つめた。大きな破裂音とともに、ロケットは斜めに飛びあがり、の木に当たっての中に落ちた。慌てて追いかけて行く男の姿が、見物人の笑いをかった。信雄も笑った。笑いながら喜一の顔を見た。なぜか④あらぬほうに視線を注いでいる喜一の目が、細くすぼんでいた。「ちえっ、あんなとこに落ちてしもたら、もう取られへんがな」走り戻って来て、男は茣蓙の上にあぐらをかき、八ツ当たりぎみに怒鳴った。「こらなし！　こんなおもちゃの一つや二つ、よう買わんのんかい。ひやかしだけのやつはどこぞに行きさらせ」「のぶちゃん、帰ろ」喜一が信雄の肩をつつき、足早にだんじりの横をすり抜けて行った。「早よ行こ、早よ行こ」喜一は笑って叫んだ。人の波はさらに増して、神社の入口でｄウズを巻いている。人混みをｅサけて路地の奥にけ入ると、喜一は服をたくしあげた。おもちゃのロケットがズボンと体の間に挟み込まれていた。「それ、どないしたん？」「おっさんがロケット拾いに行きよったとき、ったんや。これ、のぶちゃんにやるわ」信雄は驚いて喜一のから離れた。「盗ったん？」［　　　　　］そうにいている喜一に向かって、信雄は思わず叫んだ。「そんなんいらん。そんなことするのん、泥棒や」信雄の顔を、喜一は不思議そうにき込んだ。「いらんのん？」「いらん」口汚く怒鳴っていたから、まんまとロケットを盗んできたことは、信雄にも少し痛快なことであった。だが彼は⑤心とはまったく裏腹な言葉で喜一をなじっていた。喜一の手からロケットを奪い、足元に投げつけた。そして小走りで人混みの中にわけいっていった。喜一はロケットを拾い、追いすがって来て、また言った。「ほんまにいらんのん？」自分でもはっとするほどしい言葉が、信雄の口をついて出た。「泥棒、泥棒、泥棒」人波をかきわけかきわけ、信雄はむきになって歩いた。喜一の悲痛な声がうしろで聞こえた。「⑥ごめんな、ごめんな。もう盗んだりせえへん。のぶちゃん、僕、もうこれから絶対物盗ったりせえへん。そやから、そんなこと言わんとってな。もうそんなこと、言わんとってな」

●語注

だんじり＝関西・西日本の祭りに引いて歩く「」。

香具師＝縁日などに道ばたで品物の呼び売りをする人。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①はなぜか。最も適当なものを次から選べ。7点

ア　とにかくお金がないので、その場を一刻も早く立ち去りたいと思ったから。

イ　結果として二人の楽しみがなくなった責任を強く感じ、意気消沈してしまったから。

ウ　たしなめるように話しかけられ、自分のしたことの大きさを改めて感じていたから。

エ　自分を責めてこない信雄にかえってショックを受け、対応に戸惑っているから。

オ　いたわるように話しかけられ、信雄に対する言いわけがどうしても思いつかなかったから。

〔　　　〕

問２　傍線部②・③における気持ちの違いを簡潔に説明せよ。7点×2

②〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　  
　　　　　　　　〕

問３　傍線部④とあるが、喜一は何を考えていたのか、簡潔に答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　本文中の空欄に入る最も適当な語句を漢字二字で答えよ。5点

〔　　　　　〕

問５　傍線部⑤とあるが、信雄はなぜそのような行動をとったのか。最も適当なものを次から選べ。8点

ア　自分のロケットがほしいという気持ちが、喜一に盗みをさせてしまったことを反省しているから。

イ　無頓着に盗みを働くような友達と一緒に、お祭りに来てしまったことを後悔しているから。

ウ　盗みという行為を少しでも痛快に感じた自分にも腹が立ち、それが喜一へのいらだちを高めたから。

エ　喜一が平気で盗みを働くような少年だと、それまで見抜けなかった自分にも腹が立っていたから。

オ　喜一が盗んでまでロケットがほしかったことに、共感し始めている自分にも腹が立っていたから。

〔　　　〕

問６　傍線部⑥での喜一はどのような気持ちか。次の文に続くように答えよ。8点

自分がよかれと思ってしたのに、信雄の非難を受けてとまどい、

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａおびただ（しい）　ｂゆが（んだ）　ｃ鈍（い）　ｄ渦　ｅ避（け）

問１　イ

問２　②（男の様子を）愉快に楽しんでいる。

　　　③ロケットがＡ（二つも）充分に買えたとわかりＢ驚いている。

　　　（Ａの内容がなければ４点減点、Ｂの内容がなければ×）

問３　ロケットを盗むこと（を考えていた。）

問４　得意

問５　ウ

問６　なんとしても信雄と友達のままでいたいと願っている気持ち。（傍線部の内容がなければ×）

■覚えておきたい語句

□2　夥しい…………………非常に多い。

□13　固唾を呑む……………事の成り行きを案じて息をこらすさま。

〔場面解説〕

　昭和三十年代の大阪の下町。同じ年で友達となった信雄と喜一は、おもちゃのロケットを買えるかと、楽しみに天神祭に出かけていく。二人のお金を持っていた喜一のポケットは穴があいていて、穴からお金をすべて落としてしまう。喜一は信雄に、ロケットを盗んで渡そうとするが、信雄から「泥棒」と烈しい言葉でなじられてしまう。

〈作者＆出典〉宮本　輝（みやもと・てる）一九四七年（昭和22年）兵庫県生まれ。小説家。一九七八年には『』で芥川賞を受賞。また、吉川英治文学賞を受賞した『優駿』、賞を受賞した『骸骨ビルの庭』などがある。本文は、『螢川・泥の河』（新潮文庫、一九九四年）所収「泥の河」より。代表作「川三部作」（あとは『螢川』『』）の一つで、太宰治賞を受賞したデビュー作。

【読みのセオリー】

★心情は状況と行動から考える

　心情が問われている問題を、

なんとなく想像で答えを考えてはいけない。根拠を本文にきちんと求める。

　本文から、まず（１）行動や会話を確認し、次に（２）状況・事態を確認し、その両方から（３）（書かれていない）心情を推測することを意識的に行うことが大切である。

■読みのセオリー［実践］心情は状況と行動から考える

問１　喜一の心情の根拠を求めよう。

（１）喜一の行動の確認

　信雄が何を話しかけても、喜一は［１　　　　］ままだった。

（２）喜一の状況の確認

リード文から、ほしかったおもちゃのロケットが買えるかと楽しみに天神祭に出かけた。

信雄は、喜一に［２　　　　　］も持たせてやっていた。

　　　　　↓

（３）⑴・⑵から心情を推測する。

〔解答〕　１黙りこくった　２自分の分のお金

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問３　喜一がロケットを盗もうと考えていることがうかがえる箇所がある。該当する一文を抜き出して答えよ。

　［答］　なぜかあらぬほうに視線を注いでいる喜一の目が、細くすぼんでいた。

＊差し替え

問６　傍線部⑥での喜一の気持ちとして、適当でないものを一つ選べ。

ア　謝れば、信雄もなんとか許してくれるだろうと予想している。

イ　信雄が喜んでくれると思ったのに、予想と異なってとまどっている。

ウ　理由はよく分からないが、信雄の非難が激しいことにビックリしている。

エ　信雄とはなんとしても友達のままでいたいと強く望んでいる。

オ　とにかく信雄の怒りをおさめてもらいたく、必死に謝罪している。

　［答］　ア

＊新問

問７　４行目「ズボンのポケットは、両方とも穴があいていた」から読み取れることがあるとすれば何か、五字以上一○字以内で答えよ。

　［答］　・喜一の貧しさ（６字）　・喜一一家の貧しさ（８字）

　　　　　・喜一家の生活の貧しさ（10字）